



営農NEWS



ネギのネギアザミウマやさび病の防除を実施しましょう

県内のネギ栽培には多くの作型があり、ネギの主産地では周年出荷のために、常にどこかでネギが栽培されています。ネギの葉に寄生して表面を食害し、白化症状や奇形葉などで品質低下を招くネギアザミウマも、近年は多発生が続いて難防除化しています。これは、寄主となるネギなどユリ科作物が常にどこかに栽培されていて、ネギアザミウマの繁殖に有利なことや、従来は防除効果が認められていた一部の薬剤に抵抗性が発達してきたことなどが大きな要因と考えられます。また、アザミウマ類など微小害虫は増殖が早く、体が小さくて作物のすき間などに生育しているため、一度多発生すると防除効果が上がりやすく、効果が安定しない傾向があります。

なお、県病害虫防除所の「病害虫発生予報 6 月号」によりますと、5 月下旬現在におけるネギアザミウマの発生は平年より多く、また、さび病は平年よりやや多い発生となっています。

<ネギアザミウマ防除のポイント>

1. 育苗や本圃栽培中に処理できる粒剤やかん注剤の利用

殺虫粒剤やかん注剤は散布剤に比較し、一般的に持続効果が長い傾向があり、散布の労力も軽減されます。このため、本圃栽培中においても、散布剤と組み合わせ、異なる系統の薬剤によりローテーションで使用すると有効です。なお、粒剤の使用にあたっては、土壌水分が適度で、土寄せ作業の直前に処理すると、効果が安定します。

2. 増殖初期における集中散布と抵抗性害虫出現への対策

アザミウマ類など微小害虫は増殖速度が速いため、増殖初期に一週間間隔で 2~3 回集中して農薬散布を行う防除が効果的だといわれています。なお、効果の高い殺虫剤を使用する場合は、抵抗性を助長させないためにも、異なる系統の薬剤でローテーション散布を行い、散布後は必ずそれぞれの防除効果を確認してください。

3. 展着剤の加用と丁寧な散布作業

ネギは、薬液の付着しにくい作物です。薬液を付着させて防除効果を安定させるため、必ず展着剤の加用が必要です。また、微小害虫は下葉や葉鞘のすき間など薬液のかかり難い場所に生息しているため、十分量の薬液で株全体に丁寧に散布することが重要になります。

表 1 ネギ本圃の生育期におけるネギアザミウマ（アザミウマ類）の主な防除薬剤（平成 27 年 6 月 4 日現在）

薬剤名	使用量または希釈倍数	使用時期 / 使用回数
スタークル顆粒水溶剤※	400 倍 (0.4ℓ/m ² 株元灌注)	(生育期) 収穫 14 日前まで / 1 回
ベストガード粒剤※	6 kg/10a (株元散布)	(生育期) 収穫前日まで / 3 回以内
ダントツ粒剤※	3~6 kg/10a (株元散布)	(生育期) 収穫 3 日前まで / 4 回以内
ディアナ SC	2,500~5,000 倍	収穫前日まで / 2 回以内
ハチハチ乳剤	1,000 倍	収穫 3 日前まで / 2 回以内
ダイアジノン乳剤 40	700~1,200 倍	収穫 21 日前まで / 2 回以内
プレオフロアブル	1,000 倍	収穫 3 日前まで / 4 回以内
アドマイヤーフロアブル※	2,000~4,000 倍	収穫 14 日前まで / 2 回以内

注) 1. 上記薬剤の中には、処理方法が上記以外にも定植時処理など多種あります。このため、各薬剤の成分別総使用回数を超えないよう十分に注意してください。

2. ※印は、ネオニコチノイド系剤です。同一系統の連続使用は避けて、他の系統とローテーション散布してください。

表 2 ネギさび病の主な防除薬剤（平成 27 年 6 月 4 日現在）

薬剤名	希釈倍数	使用時期 / 使用回数
アミスター 20 フロアブル	2,000 倍	収穫 3 日前まで / 4 回以内
オンリーワンフロアブル	1,000 倍	収穫 14 日前まで / 3 回以内
ダコニール 1000	1,000 倍	収穫 14 日前まで / 3 回以内
ラリー乳剤	4,000 倍	収穫 14 日前まで / 3 回以内

農薬使用の際は、必ずラベル及び登録変更に関するチラシ等の記載内容を確認し、飛散に注意して使用して下さい。



生産資材部 営農企画課

電話：029-291-1012 FAX：029-291-1040